

2026

HARVARD-YENCHING

INSTITUTE WORKING

PAPER SERIES

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本における  
アリスの冒険

**AUTOETHNOGRAPHIC FICTION: ALICE'S  
ADVENTURES IN MULTILINGUAL JAPAN**

Aoyama Waka | The University of Tokyo

## 自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険 Autoethnographic Fiction: Alice's Adventures in Multilingual Japan

Waka Aoyama (The University of Tokyo)

**Abstract:** These essays are the first drafts of chapters for an autoethnographic fiction provisionally titled *Futsuno Maruchiringaru (An Ordinary Multilingual): Alice's Adventures in Multilingual Japan*, scheduled for publication in 2027; from June 2024 to February 2027, approximately twenty chapters, including a prologue and an epilogue, are being prepared in Japanese. Based on the author's personal experiences, the work follows a character named Alice, born and raised in Japan, whose first language is Japanese, and portrays her everyday use of multiple languages. Japan is often misunderstood as a "monolingual society," but this work demonstrates that it is, in fact, a "multilingual society," critically reexamining the notions of ordinariness and equality in postwar Japan from the perspective of language use. Themes such as diversity, coexistence, colonial and wartime aggression, and the power of language are explored through narratives of homeland loss and regeneration; at the same time, the work encourages critical reflection on our unawareness of the privileges of "Japanese" and "English" and the linguistic hierarchies structuring our lives, aiming to evoke readers' own "language stories." Grounded in critical metalinguistic awareness, the project seeks to explore the possibilities of creating a socially just world, and, in preparation for a future English edition—and to explore the possibilities and limits of translation—English versions of all chapters will also be included.

**Keywords:** Multilingual Japan, Language Use, Ordinariness and Egalitarianism, Colonial and Wartime Aggression, Critical Metalinguistic Awareness

**要約:** 本作は、2027年度に出版予定の自伝的民族誌的フィクション『ふつうのマルチリンガル——多言語社会日本におけるアリスの冒険』（仮題）の各章の初稿であり、2024年6月から2027年2月にかけて、プロローグとエピローグを含む約20章が日本語で執筆される予定である。著者自身の経験に基づき、日本生まれ日本育ち、母語が「日本語」であるアリスという人物が日常的に多言語を使う姿を描き、日本がしばしば「モノリンガル社会」と誤解される一方で、実際には「マルチリンガル社会」であることを示し、戦後日本における「ふつう」や「平等主義」の概念を言語使用の観点から批判的に問い直す。多様性・共生・植民地主義や戦時加害性・言葉の力といったテーマを故郷喪失と再生の物語を通じて描き出すとともに、「日本語」や「英語」の特権性や生活を形づくる言語的ヒエラルキーへの無自覚さについて批判的反省を促し、読者自身の「言語の物語」を呼び覚ますことを目指す。批判的メタ言語意識を軸に、社会的に公正な世界を構想する可能性を探る試みであり、将来の英語版出版に備えると同時に翻訳の可能性と限界を探るために、全章に英訳を付す。

**キーワード:** マルチリンガル社会としての日本、言語使用、ふつう／平等主義、植民地主義・戦時加害性、批判的メタ言語意識

## 自伝的民族的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険

東京大学東洋文化研究所

青山和佳

### 10 フィリピンの南 Mindanao いつか巡礼に行く前にII

#### 季節風に運ばれて

人びとの声にみちびかれ、子羊は言葉の海を泳ぎ、その豊かさに息をのむ。

「カリフォルニアではなくミンダナオで、ほんとうにいいんだね」クマのぬいぐるみのようなニコ先生が、わたしの目をみて言う。本郷にある大学の博士課程二年生。学位論文のために海外調査に出る。いま、その行き先を決めようとしている。こころのなかでつぶやく。アメリカ合衆国でもなく、フィリピンでもなく、ほんとうはメキシコに行きたい。でも行けない。ゼミには学部時代にメキシコに留学していた優秀な同級生がいる。わたしはおよびではない。「アメリカ」にはもっと行けない。理由を想起できないほど、苦しい記憶と結びついている。フィリピン。修士課程のころから、ある研究所の助手としてフィールドワークに通っていたから親しみはある。でも、ずっと英語を使って調査してきたから、現地語はまだできない。

「フィリピンはラテンアジアと言えなくもない」とニコ先生。たしかに、スペインによる植民地支配の歴史があり、アジアではめずらしくキリスト教、なかでもカトリックが多数派の国。そしてスペインのあとには、「アメリカ」——フィリピンの場合は実際に植民地支配された——との深い関係がある。それは、わたしが望んできたラテンアメリカとも通じている。わたしはオレンジ<sup>naranja</sup>を夢見ていたけれど、気がつけば、小さな緑の果実があたりまえのように食卓にある土地へと、向かっていた。行き先はフィリピン南部のミンダナオ (Mindanao)、それもダバオ市 (Davao City)。たまたま来校していたマル先生——ニコ先生の先生——が、「タガログ語圏ではなくセブアノ語圏がいい。日本とゆかりのあるダバオ<sup>1</sup>にしたら」と鶴の一声を響かせたのだった。

一九九七年（平成九年）、夏の研究室。その年の五月八日に「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」が成立し、この法律の附則二条により、北海道旧土人法（明治三十二年）および旭川市旧土人保護地処分法（昭和九年）が廃止された。うかつにも、わたしはこの知らせを知らないまま、ミンダナオに渡っていく。「うかつ」というのは、マジョリティ特権をもつ者として、みずからの歴史的な身体にやどる暴力性に無自覚なままに生きているからこそおかす罪である。ニコ先生とマル先生はタガログ語——あるいはフィリピン共和国の国語で、

---

<sup>1</sup> 戦前、アバカ（麻）農業に従事する日本人移民が多く暮らしていた。

公用語のひとつ<sup>2</sup>であるフィリピン語——を使って、マニラ首都圏を含むルソン島でもに調査してきた。人口の多数を占めるキリスト教徒の人びとの社会を対象としている。

その年の十月、フィリピン。「先住民の権利に関する法律 (Indigenous Peoples' Rights Act of 1997, Republic Act No. 8371)」が制定され、先住民の権利が国家によって初めて包括的に認められることになる。わたしはうかつさを重ね、この知らせも知らないまま、ダバオ市に渡っていく。あまりにも「イノセント」——これもまたマジヨリティ特権をもつ者としてのわたしの罪である——に、ダバオ市の地域共通語<sup>リンガフランカ</sup>とされるセブアノ語——しばしばビサヤ語とも呼ばれる——から、その「土地」の匂いをさがそうとする。そのころ、日本で手にはいるセブアノ語の教材といえば、日本語対訳のコンパクトな会話集だけだった。カセットテープをかけながす。水のなかで母音がほどけていく、それでいて柔らかいだけではない、初めてなのになつかしい。

## 草を食む羊のように

一九九八年、わたしはミンダナオ島ダバオ市の語学学校、Maryknoll Institute of Language and Culture (MILC) に留学する。アメリカのメリノール宣教会が一九五八年に設立したこの学校は、当時、ダバオ市パンパンガ地区の古い校舎にあり、カトリック宣教者を主な対象としていた。ローマ法王ヨハネ・パウロ二世が語ったように、「その土地の言語と文化に身をひたす」ため、セブアノ語とタガログ語教育を通じてフィリピン文化の理解を深めようとしていた。わたしはセブアノ語初級通常コースに参加し、現地語教師との個別練習や文法講義、語学ラボでのリスニング、文化紹介などを受ける。英語で行われる授業には、「言語は習慣である」とする反復重視のメソッドが貫かれている。わたしは宣教師ではなく「一般人」として入学許可をもらう。

なんということなのだろう。わたしはカトリックの洗礼を受けているけれど、宣教するとはいかなることか考えたことがない。毎日、お昼休みに、同級生——外国から来たばかりの司祭——が、つたないセブアノ語であげるミサにあずかる。罪の告白で、akong sala, akong sala, akong dagkong sala (わたしの罪、わたしの罪、わたしの大きな罪) と唱え、目に見えてはっきりと胸を三回打つ。日本語のミサの控えめな所作とはちがう。詩篇を答唱するとき、歌が苦手なわたしは声がふるえてしまい、はずかしい。Magbalantay kanako ang Ginoo, wala nay magmakulang pa kanako (主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない)。そうか、わたしは羊。フェンスに守られ、セブアノ語という草を食ませてもらっている。ここにいていいのかな、迷える羊なんじゃないかな。

ホームステイ先の邸宅からハイウェイ沿いを歩き、インシュラーホテルをすぎて右にまがり海に向かうと、MILC の敷地が見えてくる。一本の脚と二本の松葉杖で飛ぶよ

---

<sup>2</sup> もうひとつの公用語は英語。

うに移動するジョイが、教室に迷っているわたしを案内してくれる。月曜から金曜まで、朝八時半から三十分単位で九時限の授業がある。一限目は文法講義、のこり八限は、小さなラボでリスニングや発音ドリル三十分、次にセブアノ話者の教師とスピーキングのパターン・プラクティス三十分、というラウンドを四回くりかえす。午前にはメリエンダ (merienda) ——おやつ休憩——があり、昼休みも長い。午後三時半で終了し、帰り道、「アメリカ人」の同級生と、草の匂いのするセブアノ語でおしゃべりする。つたなすぎる。お互いの母語が透けて聞こえる。潮風が吹いてくる。

最初に教わったのは、セブアノ語の古い正書法では、母音が a・i・u の三つしか使われていなかったということだった。え？ e と o がいないの？ でも、実際にはその音はあって、いまの正書法では五母音——a・e・i・o・u——が区別されている<sup>3</sup>。つぎに習ったのは、focus (焦点) という考え方。たとえば、「子羊が草を食む」は、Mo-kaon ang kordero ug sagbot (子羊が草を食べる)。それなのに、草に焦点をあてると、Kan-on sa kordero ang sagbot (草が子羊に食べられる) になる。動詞の原形 kaon に接辞をつけて、だれが焦点かを示す。名詞が主語かどうかではなく、語り手がなにを目立たせたいかで文のかたちが変わる。さらには、テンス (時制) ではなくアスペクト (相) を使う。過去形のように見えても、それは「完了」か「未完了」か。わたしはただ、kordero (子羊) のように、目の前の草をすこしずつ、食んでいくしかない。

### この地に咲いた声たち

アテネオ・デ・ダバオ大学 (Ateneo de Davao University, 通称 AdDU) の先生の紹介で、地元の名家ティオンコ家 (Tiongco — Tionko ではなく) にホームステイする。通りに面した大きな門をはいるとブーゲンビリヤが咲き乱れている。住み込みのお手伝いさん、ナン・テリヤがセブアノ語で言う。「ブガンビリヤ (bugambilya) だよ、ブンピル (bumpil) とも呼ぶよ」新しい名前で見えなおいなおしていく。ハイビスカスらしき花に声をかける。あなたは何と呼ばれているの？ 「グマメラ (gumamela) です」スペイン語？ スペイン人に名づけられたの？ グマメラたちはくすくすとわらう。「だれかが名づけたかもしれませんが、いまはわたしたちの名前なのです」かつて「フィリペ二世の諸島」(Las Islas Filipinas) とよばれたこの地で、スペイン語を生き延びて、いまも息づく現地のことば。

大きいけれど飾りけのない家のなかに入り、閉じた中庭の池のそばに立つ。錦鯉が寄ってくる。池のまわりには、イエスの受難——十字架の道行き——を描いた十四ステーションのタイル画。聖ヨセフ像がそれを見守るように立っている。そのおくに、この家の主人ナン・カリンの居室と、いまは中年の七人の子どもたちがかつて使ったピンク・ルーム (「女の子」用) とブルー・ルーム (「男の子」用) がある。部屋の前

---

<sup>3</sup> セブアノ語には、半母音がふたつ (w, y [= /j/]) あり、それ以外におおよそ十四の子音がある。これには、のどの奥で音をいったん止めて出す声門閉鎖音 ([ʔ]) も含まれる。

の広い空間には、家族写真や卒業証書が額に入れられ並んでいる。夫は建設会社を営むエンジニアで、市議も務めた。かなり前に亡くなり、この家に着いた日は命日を記念する親族の集まりが開かれていた。ふたりともボホール(Bohol)島出身で、戦後ダバオに移住。ナン・カリンは食事をともにしながら、日本との貿易や大阪万博の記憶を英語で語ってくれた。

Espera (まって)。いま、ダバオ市ではセブアノ語が広く使われ、タガログ語や英語も通じる。でも、それはずっと昔からのことではない。米国統治下の移住政策や日本による戦時占領といった暴力、あるいは自主的に、ときには偶然に、この地におとずれた人びととの交わりが、この地の姿を大きく変えてきた。スペイン統治期の影響もわずかに残るものの、それ以前は、さまざまなムスリムの共同体や先住民がこの土地に根づいていた。かれらの言葉はいまも語られている。数は少ないけれど、色彩ゆたかに、生き生きと暮らしのなかに息づいている。苦労を抱えながらも、互いに場所を見つけ、共に生きている。その多様性を祝うように、毎年八月にはカダヤワン祭りが開かれ、舞踊や音楽が街を彩る。織り布のように重なりあう声や果物の山車が行き交うなか、この街の過去と現在が、祝福のように響いている。

そのうちに、MLIC の機械的な反復ドリルに飽きてしまい、二十五週のコースを八週でドロップアウト。家庭教師を雇い、路上運転にくりだす。ナン・カリンの邸宅からダウンタウンにある家具付きサービスアパートメント（地元ではアパーテルと呼ばれている）に引越し、ひとり暮らしを始める。そこから、ニコ先生に紹介された NGO に通い、「都市貧困層の生活」にかんする予備的調査を始める。NGO で一回りほど年上のセブ (Cebu) にルーツをもつクララに出会う。リサーチアシスタントとして契約する。それはわたしが考えるよりも一万倍くらい親密な関係で、ごはんを一緒に食べ、おやつを一緒に食べ、お昼寝させてくれ、いつもそばに居てくれる。Ilabay tika sa bintana kung mag-Iningles ka (英語をしゃべったら窓から投げすてる) と明るく言う。

クララに連れられて、ケソン大通り (Quezon Boulevard) から沿岸の砂州——イスラ・ベルデ (Isla Verde) に架かる、不揃いのココナッツ材を組んだ橋を渡る。ダバオ市は全体としてクリスチャンの住民が多いけれど、この地区にはムスリムの住民が多く、なかでも「マラナオ」と呼ばれる人びとが多い。タウスグやマギンダナオ、サマ系の人びとも暮らす。バランガイ (Barangay) では、村長にあたるキャプテンから評議員にあたるカガウッドまで、多くのポストをマラナオ系の人々が担っている。大小さまざまなモスクが立ち並び、マラナオ語の会話が飛び交い、白い帽子をかぶった男性たちやベールをまとった女性たちが行き交う。礼拝の時刻にはミナレットからアザーンが響く。クララとわたしはセブアノ語を使い、マラナオの人びともそれに応じてセブアノ語で話してくれる。タガログ語が混ざるときもある。英語で話すことは少ない。

## 波を渡っていく声——天にいるラサのために

夜の海に 家はたゆたう

裸電球の下 ラサが手をとる  
「あなた、書いて」

それは サマ語だった  
書くよりも 語られる舟  
目に映らず 耳を揺らす

サンボアंगा (Zamboanga) の岸辺で暮らし  
チャバカノ語 タウスグ語 ヤカン語  
どれも 生命をはこぶ水だった

「なぜ そんなに多く？」  
たずねると ラサは風のように  
「なぜ そんなに一つだけ？」

言葉は 選ぶものじゃない  
磯辺に落ちている  
ナマコのように 拾うだけ

月の暗闇が ラサの頬に触れる  
Amatay bulan—一月のない夜  
声が渡る 舟のように

ニッパの壁に 影が泳ぐ  
この世に 書けぬ声がある  
ゆたかな、ゆたかな、魚の群れ

わたしは魚をとりにながす  
サンゴの森にとけこもう  
夜のあいだだけでも

掌に 潮のようなインク  
朝ひとり なぞってみる  
ラサの声が まだ揺れる

「聞こえる？」 ラサのささやき  
「いつか わかる日が  
空のように きますように」

**都市と波のあわいで**

Unya, もう一回言わせてね。

Okay, isulti nako kana pag-usab.

人びとの声にみちびかれ、子羊は言葉の海を泳ぎ、その豊かさに息をのむ。

Gigiyahan sa mga tingog sa katawhan, ang kordero naglangoy sa dagat sa mga pulong, ug nahibulong siya sa kadagaya.

早朝から夕方まで、イスラ・ベルデのサマの人びとの集落に通う。「ダバオ市でもっとも生活が苦しい」と言われる。海辺に建てられた杭上家屋は、満ち潮になれば美しい海に浮かぶ村のようになり、引き潮になれば流れ着いて山のようになった大量のプラスチックまじりのゴミの島のようになる。このころはまだ学校に通ったことのない人がほとんどで、言葉や宗教——クリスチャンでもムスリムでもない、のちに宣教を受け入れクリスチャンになっていく——がまわりと異なることもあり、「雇われる」ということが少なく、男性は漁にでたり、女性と子どもは古着を行商したり、お年寄りはときに物乞いをしたり、ミンダナオばかりではなくフィリピン各地に散在するサマの人びとの集落から集落へと移り住んだりしながら、日々を営んでいた。

サマの人びとはわたしたちにセブアノ語を使ってくれる。ここに、サマ語(Sinama)を教えてくれるフォーマルな学校はない。SIL (Summer Institute of Linguistics)<sup>4</sup>によりサマ語に翻訳された新約聖書を見かけることはある。家のなかにお守りのように置かれており、「文字として読む」人はほとんどいないため、読み方を教えてほしいとは頼みにくい。日本から留学してフィリピン大学で言語学を専攻する友人とマレーシアで研究する友人が共同して、「東南アジア海域世界」のさまざまな地域に分散居住するサマの人びとの語彙——各地域でバリエーションがある——を集めていて、そのリストや簡易な会話集を送ってくれたものの、文法の理解なしにどう学んでよいか、わからない。そもそも、このころのわたしは、セブアノ語だけで精一杯だった。

そんなわたしを見るに見かねて、「マスタル<sup>5</sup>」を引き受けてくれたのが、バイランだった。病気がちの夫——もとサメ漁師——を古着行商<sup>ukayukay</sup>で支え、五人の娘たち——上の三人はもう結婚している——とたくさんの孫たちがいて、丸竹を数本束にした通路でつながった数軒の中心に暮らしている。立っていても、しゃがんでいても背筋がぴんと伸びており、人生の苦楽をくべることで、日々の生きる力を湧き立たせている。彼女は、高校に通う、読み書きのできる孫娘マリサを呼び、「リス(わたしのこと)に書いてやりなさい」と命じる。わたしが MILC のセブアノ語の教科書から例文を拾うと、マリサがそれをサマ語に訳し、バイランに聞かせて確認し、ノートに書きつけて

---

<sup>4</sup> 一九三四年にアメリカ合衆国のアーカンソー州で設立された非営利のキリスト教信仰にもとづく言語学研究機関。おもな目的は、少数言語の研究や記録を通じて、言語の知識を拡大し、識字率や聖書の翻訳を支援すること。二〇二四年、創立九十周年を迎え、名称を「International SIL」から「Global SIL」に変更した。

<sup>5</sup> 「mastal」はサマ語で「先生」を意味する。

くれる。休めるように、わたしの名前を編み込んだござも編んでくれて、ほぼ材料費だけで売ってくれた。

Espera（待つ）、わたしがやっていることは、無自覚の暴力ではないか。アメリカ合衆国起源のカトリック宣教会が作った現地語の教科書——ダバオでのマジョリティ言語であるセブアノ語——を介して、本来は声で伝えられてきた言葉を、わたしがわかりたいがために文字として書きとっている。それでよいのか？ もしわたしが書いているわたしの言葉を、見知らぬ誰かがやってきて、文字としては読めないから、すべてを声にしてほしいと言ったら？ その人を客人として受け入れ、ようこそ、と抱きしめ、歓待できるだろうか。惜しみなく、わたしの言葉を、その人が手に入れたい形で、贈ることができるだろうか。その人が、わたしを傷つけたり、陥れたり、闘ったり、自由や尊厳、生命を奪うかもしれなくても、隣人として愛せるだろうか。

「水上」集落は、外から入ると「高さ」を感じる。家々を迷路のようにつなぐ細い橋には手すりなどない。わたしはときどき落ちた——満ち潮なら海に、引き潮ならゴミの山に。たいてい、足をおっかなびっくりゆっくり運びすぎていたり、「高さ」におびえたりしているとき。小さく走るようにリズムカルに進んだほうが、かえってバランスがとれる。いったんなかに入れば、家の床や露台は通路とほぼ同じ高さで、「高さ」はもう感じない。潮の満ち引き、波と風がかなでる音に、感覚がひらいていく。ある日、バイランの夫が船の中央にわたしたちを座らせ、岸を離れた。ダバオの街が遠ざかる。船の揺れと波のリズムに体幹を乗せていけば、酔いもしない気がした。船の先端にはバイランがまっすぐ立ち、腕をのばして進む先をしめしていた。

## Autoethnographic Fiction: Alice's Adventures in Multilingual Japan<sup>6</sup>

Institute for Advanced Studies on Asia, the University of Tokyo  
Waka Aoyama

### Chapter 10 Southern Philippines: Mindanao — Before I Go on Pilgrimage II

**Note on languages and spellings:** In this chapter, Cebuano is used as the primary language of interaction in Mindanao, while Tagalog (Filipino) and English appear as national and institutional languages. Cebuano expressions are presented in their original form in dialogue and examples, with English translations provided where necessary. References to other languages (e.g., Sinama, Maranao, Tausug, Chavacano) are retained to reflect the linguistic diversity of the region. Place names and proper nouns generally follow widely used English forms (e.g., Davao City, Mindanao), while local usages are preserved where relevant.

#### Carried by the Monsoon Winds

Led by the voices of people, the lamb swims through a sea of words, and is left breathless by its abundance.

“Are you really sure—Mindanao, not California?” Professor Niko, who looks like a teddy bear, says this while looking into my eyes. I am in my second year of the doctoral program at a university in Hongo. I am preparing to go abroad for fieldwork for my dissertation. Now, I am trying to decide where to go. I murmur to myself. Not the United States, not the Philippines—I really want to go to Mexico. But I cannot. In my seminar, there is an outstanding classmate who studied in Mexico as an undergraduate. I am not in that league. I cannot go to “America” even more so; it is tied to memories too painful to recall clearly. The Philippines—I am familiar with it, having gone there for fieldwork as a research assistant at an institute since my master’s program. But I have always conducted my research in English, and I still do not speak the local languages.

“The Philippines could be called a kind of Latin Asia,” Professor Niko says. It is true: it has a history of Spanish colonial rule, and, unlike most of Asia, Christianity—particularly Catholicism—is the majority religion. After Spain came “America”—in the Philippine case, actual colonial rule—and the ties remain deep. In that sense, it resonates with the Latin America I had longed for. I had dreamed of oranges (*naranja*), yet before I knew it, I was heading toward a place where small green fruits (*calamansi*) sit naturally on the table. My destination would be Mindanao in the southern Philippines—specifically, Davao City. By chance, Professor Maru—Professor Niko’s own mentor—was visiting

---

<sup>6</sup> In this essay, italicization of non-English expressions is used solely for readability and does not imply any hierarchy among languages.

our university at the time, and declared with finality: “Better Cebuano than Tagalog. Why not Davao, which has historical ties with Japan<sup>7</sup>?”

Summer, 1997. A university office. On May 8 of that year, the Act on the Promotion of Ainu Culture and the Dissemination and Advocacy of Knowledge about Ainu Traditions was enacted, and with it, the former Hokkaido Former Aborigines Protection Act (1899) and the Asahikawa Former Aborigines Protection Land Disposition Act (1934) were abolished. Unthinkingly, I left for Mindanao without knowing any of this. “Unthinking”—this is a failing committed precisely by those who live with majority privilege, unaware of the violence embedded in their own historically formed bodies. Professor Niko and Professor Maru had conducted their research primarily in Luzon, including Metro Manila, using Tagalog—or Filipino, the national language of the Republic of the Philippines and one of its official languages<sup>8</sup>—focusing on the lives of the predominantly Christian population.

In October of that same year, the Indigenous Peoples’ Rights Act of 1997 (Republic Act No. 8371) was enacted, marking the first comprehensive recognition of indigenous rights by the state. I only repeated this unthinking, arriving in Davao City without knowing this as well. In a state that was all too “innocent”—this too a sin born of majority privilege—I began searching for the scent of the “land” through Cebuano, the lingua franca of Davao City, often referred to as Visayan. At the time, the only Cebuano learning materials available in Japan were compact phrasebooks with Japanese translations. I played cassette tapes over and over. Vowels loosened in the water—yet they were not only soft; they felt strangely familiar, though I was hearing them for the first time.

### **Like a Grazing Lamb**

In 1998, I went to study at the Maryknoll Institute of Language and Culture (MILC), a language school in Davao City on the island of Mindanao. Established in 1958 by the Maryknoll Missionaries of the United States, the school was then located in an old building in the Pampanga district of Davao City and primarily served Catholic missionaries. As Pope John Paul II had expressed, its aim was to “immerse oneself in the language and culture of the land,” and it sought to deepen understanding of Philippine culture through the teaching of Cebuano and Tagalog. I enrolled in the regular beginner’s course in Cebuano, where I received one-on-one practice with local language instructors, grammar lectures, listening sessions in the language lab, and cultural orientation. The classes, conducted in English, followed a method that emphasized repetition, based on the idea that “language is habit.” I was admitted not as a missionary, but as a “lay person.”

What does this mean, I wonder. I have been baptized as a Catholic, and yet I have never really thought about what it means to engage in mission. Every day, during the lunch break, I attend a Mass offered in halting Cebuano by a classmate—a priest who has only

---

<sup>7</sup> Before World War II, the area was home to many Japanese migrants engaged in abaca (hemp) cultivation.

<sup>8</sup> The other official language is English.

just arrived from abroad. During the confession, we recite *akong sala, akong sala, akong dagkong sala* (my sin, my sin, my great sin), and strike our chests three times, visibly and deliberately. It is different from the more restrained gestures of the Mass in Japanese. When we chant the psalm in response, my voice trembles—I am not good at singing, and I feel embarrassed. *Magbalantay kanako ang Ginoo, wala nay magmakulang pa kanako* (The Lord is my shepherd; I shall not want). So, I am a lamb. Protected by a fence, being fed on the grass of Cebuano. Is it all right for me to be here? Am I a lost lamb?

From the house where I stay, I walk along the highway, pass the Insular Hotel, turn right toward the sea, and the grounds of MILC come into view. Joy, who moves as if flying with one leg and two crutches, guides me when I lose my way to the classroom. From Monday to Friday, there are nine class periods a day, beginning at 8:30 in the morning, each lasting thirty minutes. The first period is a grammar lecture; the remaining eight consist of repeated rounds: thirty minutes of listening and pronunciation drills in a small lab, followed by thirty minutes of speaking pattern practice with a Cebuano-speaking instructor—this sequence repeated four times. There is a *merienda*—a snack break—in the morning, and the lunch break is long. Classes end at 3:30 p.m., and on the way home, I chat with an “American” classmate in Cebuano, which smells faintly of grass. We are far too clumsy. Our native languages show through in our speech. A sea breeze blows in.

One of the first things I learned was that in the older orthography of Cebuano, only three vowels—*a, i, u*—were used. What? No *e* and *o*? But the sounds do exist, and in the current orthography, five vowels—*a, e, i, o, u*—are distinguished<sup>9</sup>. The next thing I learned was the concept of focus. For example, “The lamb eats grass” is *Mo-kaon ang kordero ug sagbot* (The lamb eats grass). But when the focus shifts to the grass, it becomes *Kan-on sa kordero ang sagbot* (The grass is eaten by the lamb). By attaching affixes to the verb root *kaon*, the sentence indicates what is in focus. It is not a matter of whether a noun is the subject; rather, the form of the sentence changes according to what the speaker wishes to foreground. Furthermore, Cebuano uses aspect rather than tense. Even when a form appears to be in the past, it indicates whether an action is “completed” or “incomplete.” Like a *kordero* (lamb), I can only nibble, little by little, at the grass before me.

### Voices That Bloomed in This Land

Through an introduction by a professor at Ateneo de Davao University (AdDU), I begin a homestay with the Tiongco family (not “Tionko”), a prominent local family. Passing through the large gate facing the street, I am greeted by bougainvillea in full bloom. Nan Teriya, a live-in helper, says to me in Cebuano, “It’s *bugambilya*—it’s also called *bumpil*.” I begin to encounter the world anew through these new names. I speak to a flower that looks like a hibiscus. What are you called? “*Gumamela*,” it answers. Spanish? Were you named by the Spanish? The gumamela flowers giggle softly. “Someone may have named

---

<sup>9</sup> Cebuano has two semivowels (*w* and *y* [= /j/]) and approximately fourteen consonants. These include the glottal stop ([ʔ]), produced by a momentary closure of the vocal cords.

us, but now it is our name.” In this land once called *Las Islas Filipinas*—the Islands of Philip II—local words that have lived through Spanish continue to breathe.

I enter the large yet unadorned house and stand by the pond in its enclosed courtyard. Koi gather near me. Around the pond are tiled images depicting the fourteen Stations of the Cross—the Passion of Jesus. A statue of Saint Joseph stands as if watching over them. Beyond, there is the room of Nang Caring, the head of the household, and the Pink Room (for “girls”) and Blue Room (for “boys”), once used by her seven children, now all middle-aged. In the wide space before the rooms, family photographs and diplomas are displayed in frames. Her husband, an engineer who ran a construction company and served as a city councilor, passed away many years ago; on the day I arrived, a family gathering was being held in memory of his death. Both were from the island of Bohol and had moved to Davao after the war. As we shared meals, Nang Caring spoke in English about trade with Japan and her memories of the Osaka Expo.

*Espera* (wait). Today, Cebuano is widely spoken in Davao City, and Tagalog and English are also understood. But this has not always been the case. The shape of this place has been transformed by violence—such as migration policies under American rule and wartime occupation by Japan—as well as by encounters with people who came here voluntarily, or sometimes by chance. Although traces of Spanish rule remain, before that, various Muslim communities and indigenous peoples had long been rooted in this land. Their languages are still spoken today. Though few in number, they remain vibrant, alive within everyday life. Bearing their own hardships, people find places for themselves and live together. As if to celebrate this diversity, the Kadayawan Festival is held every August, filling the city with dance and music. As voices overlap like woven cloth and floats piled high with fruit pass through the streets, the past and present of this city resound like a blessing.

Before long, I grow weary of the mechanical repetition drills at MILC and drop out of the twenty-five-week course after eight weeks. I hire a private tutor and begin practicing driving on the streets. I move out of Nang Caring’s house and into a furnished serviced apartment in downtown Davao—locally called an “apartelle”—and begin living on my own. From there, I start going to an NGO introduced to me by Professor Niko and begin a preliminary study on “the lives of the urban poor.” At the NGO, I meet Clara, about ten years older than I am, who has roots in Cebu. I hire her as a research assistant. It becomes a relationship far more intimate than I could ever have imagined—we eat meals together, share snacks, she lets me nap, and she is always by my side. “*Ilabay tika sa bintana kung mag-Iningles ka*” (If you speak English, I’ll throw you out the window), she says cheerfully.

Led by Clara, I cross from Quezon Boulevard over a narrow bridge made of uneven coconut lumber, spanning the coastal sandbar toward Isla Verde. While Davao City as a whole has a predominantly Christian population, this area is home to many Muslim residents, especially those known as Maranao. People of Tausug, Maguindanao, and Sama backgrounds also live here. In the barangay, many positions—from the captain, who serves as the village head, to the kagawad, or council members—are held by Maranao individuals. Mosques of various sizes stand throughout the area, Maranao is

heard in conversation, and men in white caps and women in veils move through the streets. At prayer times, the call to prayer sounds from the minarets. Clara and I speak in Cebuano, and the Maranao people respond in Cebuano as well. At times, Tagalog is mixed in. English is rarely used.

### **Voices Crossing the Sea — For Lasa in Heaven**

On the night sea, houses drift  
Beneath a bare bulb, Lasa takes my hand  
“Write,” she says

It was Sinama  
A boat spoken rather than written  
Unseen, yet stirring the ear

Living by the shores of Zamboanga  
Chavacano, Tausug, Yakan  
each a water carrying life

“Why so many?”  
When I ask, Lasa is like the wind  
“Why only one?”

Language is not something to choose  
It lies along the shore  
like sea cucumbers, you simply gather it

The darkness of the moon touches Lasa’s cheek  
*Amatay bulan*—a moonless night  
Voices cross over like boats

Shadows swim on nipa walls  
There are voices in this world that cannot be written  
Rich, so rich, a shoal of fish

I let the fish go  
Let me dissolve into the coral forest  
if only for the night

In my palm, ink like the tide  
In the morning, alone, I trace it  
Lasa’s voice still trembles

“Can you hear it?” Lasa whispers  
“May a day come when you will understand  
like the sky”

## Between the City and the Waves

*Unya, let me say it once more.  
Okay, isulti nako kana pag-usab.*

Led by the voices of people, the lamb swims through a sea of words, and is left breathless by its abundance.

*Gigiyahan sa mga tingog sa katawhan, ang kordero naglangoy sa dagat sa mga pulong, ug nahibulong siya sa kadagaya.*

From early morning until evening, I go to the Sama settlement in Isla Verde. It is said to be “the most impoverished area in Davao City.” Houses built on stilts along the shore become, at high tide, like a beautiful village floating on the sea; at low tide, they turn into something like an island of waste, where large amounts of plastic debris drift in and pile up like a mountain. At that time, most people had never attended school, and because their language and religion—neither Christian nor Muslim, though many would later accept Christian missions—differed from those around them, they were rarely “employed.” Men went out to fish; women and children sold secondhand clothes; the elderly sometimes begged. Moving from one settlement to another—not only within Mindanao but across various parts of the Philippines where Sama communities are scattered—they lived their daily lives.

The Sama people speak to us in Cebuano. There is no formal school here that teaches Sinama. I sometimes see copies of the New Testament translated into Sinama by SIL (Summer Institute of Linguistics)<sup>10</sup>, placed in homes like protective objects. Because very few people “read” them as written texts, it feels difficult to ask someone to teach me how to read them. A friend studying linguistics at the University of the Philippines, and another conducting research in Malaysia, have been working together to collect vocabulary from Sama communities dispersed across different regions of what is called the “maritime Southeast Asian world”—with variations across locations—and they sent me lists and simple phrasebooks. But without an understanding of grammar, I do not know how to learn from them. In any case, at that time, I was already struggling just to keep up with Cebuano.

Seeing me like this, **Baylan** was the one who agreed to take on the role of “mastal<sup>11</sup>.” She supports her often-ill husband—a former shark fisherman—by selling secondhand clothes (*ukay-ukay*), and lives at the center of several houses connected by narrow walkways made of bundled bamboo poles, together with her five daughters—three of whom are already married—and many grandchildren. Whether standing or squatting, her back is always straight, as if the joys and hardships of life were fuel that sustained her strength each day. She calls over her granddaughter **Marisa**, who is in high school and

---

<sup>10</sup> A non-profit linguistic research organization based on Christian faith, established in 1934 in Arkansas, United States. Its primary mission is to expand knowledge of languages through the study and documentation of minority languages, and to support literacy and Bible translation. In 2024, marking its 90th anniversary, it changed its name from “International SIL” to “Global SIL.”

<sup>11</sup> “Mastal” means “teacher” in Sinama.

can read and write, and tells her, “Write for Ris (as they called me).” When I pick example sentences from my Cebuano textbook from MILC, Marisa translates them into Sinama, reads them aloud to Baylan for confirmation, and writes them down in my notebook. She also weaves a mat with my name in it so that I can rest, and sells it to me for little more than the cost of materials.

*Espera* (wait). Is what I am doing a form of unthinking violence? Through Cebuano—the majority language in Davao—and through teaching materials produced by a Catholic missionary organization originating in the United States, I am writing down, as text, words that were originally transmitted through voice, simply because I want to understand them. Is that acceptable? If someone unknown were to come to me and say that they cannot read what I have written, and ask me to render everything into voice—would I be able to receive that person as a guest, to embrace them and say welcome, to offer hospitality? Could I give my words freely, in the form that they wish to receive them? Even if that person might harm me, betray me, fight me, take away my freedom, my dignity, my life—could I still love them as a neighbor?

Entering the “water” settlement from outside, one feels its height. The narrow walkways that connect the houses like a maze have no railings. I sometimes fell—into the sea at high tide, or into piles of garbage at low tide. Usually when I was moving too cautiously, step by step, or when I was afraid of the height. It is easier to keep one’s balance by moving in a small, rhythmic run. Once inside, the floors of the houses and their verandas are at nearly the same level as the walkways, and the sense of “height” disappears. As I listen to the sounds of the tides, the waves, and the wind, my senses begin to open. One day, Baylan’s husband seated us in the center of a boat and pushed off from the shore. The city of Davao receded into the distance. If I aligned my body with the rhythm of the waves and the rocking of the boat, I felt I would not become seasick. At the bow, Baylan stood upright, extending her arm to indicate the direction ahead.